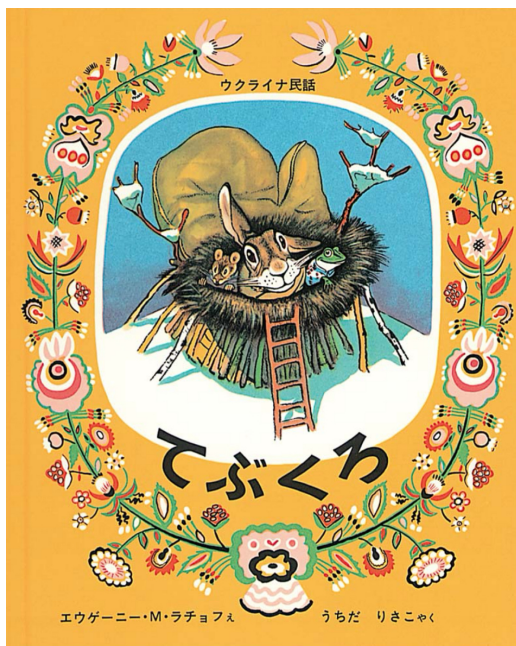


絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～[絵本『てぶくろ』の世界を楽しむ]～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
中島さや・増永千夏・甲斐田千夏
戸田有香・田中柚菜・野田栞里
徳田葵・野田穂乃香・富田結香
黒田美桜・鐘ヶ江梨奈
石井美夢・由迫咲希

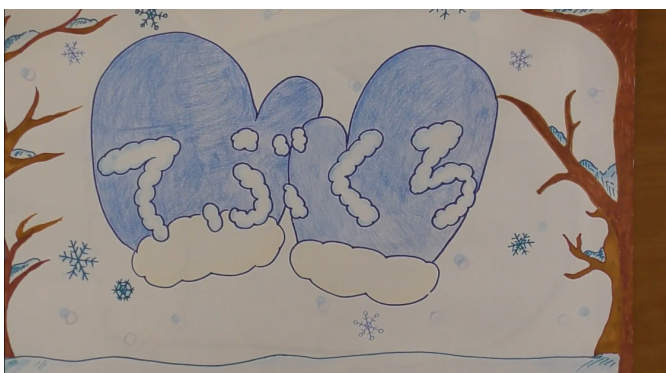


題材とした絵本：『ウクライナ民話 てぶくろ』
文：アルビントレッセルト 絵：エウゲー
ニー・M・ラチョフ
訳：うちだ りさこ 出版：福音館書店
発行日：1965年11月
タイトル：「てぶくろ」

実践準備の担当：プロデューサー（増永千夏）、
衣装（中島さや・野田栞里・野田穂乃香）、小道具
（増永千夏・戸田有香・徳田葵）、音楽（富田
結香・徳田葵）、記録・報告書（由迫咲希・鐘ヶ
江梨奈）、会計（甲斐田千夏・石井美夢）

実践時の担当：くいしんぼうねずみ（戸田有香）、ぴよんぴよんがえる（石井美夢）、はやあしうさぎ（野田穂乃香）、おしゃれぎつね（甲斐田千夏）、はいいろおおかみ（鐘ヶ江梨奈）、きばもちいのしし（野田栞里）、のっそりぐま（増永千夏）、おじいさん（由迫咲希）、こいぬ（中島さや）、ナレーション（黒田美桜）、音・演奏（徳田葵・富田結香）、カメラ（田中柚菜）

1. 題材「てぶくろ」選定の理由



この『てぶくろ』の絵本は雪の降る寒い冬の物語で幼教こども劇場のある12月にふさわしい内容であると思ったからだ。この絵本にはたくさんの動物たちが登場し、動物たちの名前の中にはそれぞれ「くいしんぼうねずみ」「ぴよんぴよんがえる」「はやあしうさぎ」「おしゃれぎつね」「はいいろおおかみ」「きばもちいのしし」「のっそりぐま」などのように形容詞

や修飾する言葉が含まれており、その動物がどのような性格や特徴であるのか分かりやすくなっている。

また、物語の内容もおじいさんが落とした手袋の中に、くいしんぼうねずみが住み始め、次にぴよんぴよんがえるがやって来て仲間に入れてもらうという短い物語である。その後も次々と仲間が増えていき繰り返しのリズムで物語が展開していく為、子ども達が次の場面を想像しやすく想像力を膨らませやすい内容になっている。動物達のやり取りの中でも「いれて」「どうぞ」という言葉が繰り返し使われており、このやり取りを通して子ども達にも言葉のやり取りの楽しさを味わってもらいたいと思い題材を設定した。対象年齢は言葉数が大幅に増える3歳児にふさわしい内容だと思い3歳児を対象に台本を考えた。

(執筆者：野田 穂乃香)

2.絵本の世界から遊びへの展開

今回『てぶくろ』という絵本を題材に、場面に分けて遊びの展開を3つに分けて考えた。



一つ目は、導入の動物クイズ。

導入の時に絵本の内容に繋がるよう、動物のお面を使い動物クイズをするというものである。(左写真)初めは、子ども達にお面を選んでもらい劇に繋いでいたがお面を選ぶ際に偏りがある事と、導入であるがワクワクさが無いことに気付いた。偏りがあったのはその動物を知らないという可能性もあると考えた。動物クイズを取り入れた事により、次は何の動物が出るのかと言う嬉々とした表情が増えて劇中にもそのワクワクさが持続し

た。



二つ目は、手袋の工夫。

手袋に見立てた輪っかを無くした事である。(左写真)劇中に大きな手袋が出てくるため、保育室にも手袋に代用できるものとして、すずらんテープを使った大きな輪っかがいいのではないかと考えた。しかし、プレ幼教こども劇場で実際に使用してみたところ子ども達が狭そうにしていたり、動きが制限されてしまっていて後半からあまり遊びに集中できていないように思えた。保育室にいる子ども達全員で遊べる事を主にしたかったため、輪っかを無くして保育室全体を使う事にした。

め、輪っかを無くして保育室全体を使う事にした。

三つ目は、遊びと挿入歌。

動物達によって遊びや挿入歌などを工夫した事だ。「くいしんぼうねずみは小さく跳ねて登場」「ぴよんぴよんがえるはカエルの真似をしながらカエルの歌を歌う」というように、3歳児さんでも取り組みやすく簡単な動きや知ってる歌を取り入れてみた。のっそりぐまの場面のおしくらまんじゅうでは、「ぎゅっぎゅっぎゅ」と楽しく歌いながらくっついて跳ねる

動きを入れたことでさらに子ども達も楽しく遊べたように思う。幼教こども劇場では、教室全体でお面をかぶってる自分の動物だけでなく、他の動物にもなりきり跳ねたり走ったり、まるで物語に入ったように一体感のある楽しい遊びを繰り広げることができた。

(執筆者:徳田葵)

3.実践に際して大切にしたこと

幼教こども劇場では絵本の読み聞かせとは違いとは違い、映像として流れるため子ども達の視点に合わせた映像の動き、豊かな音楽なども加わり、日常ではできないような、いわば疑似体験ができ、子ども達の想像の世界をより広げてくれるよう取り組んだ。劇内では『てぶくろ』という題名に沿い、「入れて」「いいよ」のメインを大切に活動を行った。子どもが遊びの輪に入ろうとする時、どのようにすれば仲間に入ることができるのかという方法を



見出すことができたのではないかと思います。リモート映像として子ども達と関わるため、どのような角度・立ち位置ですと見えやすいのかの調整を行った上で、大きい動きや言葉掛けを心掛けた。劇内では様々な動物に合わせた遊びや音楽を取り入れることで子ども達の動物と活動の関連性を学ぶきっかけになったのではないかと思います。その中で小さくなって歩く、ジャンプする、止まる、片足で立つなど脚力や瞬発力、バランス力を育むねらいを取り入れた。冬という時期だからこそこの遊びであるおしくらまんじゅうではぎゅっとくっつくことで温まることができるということを学べ、仲間意識をよりいっそう高めることができたのではないかと思います。(左写真)

(執筆者:石井美夢)

4.内容について

(1) 全体の構成

私たちは動物役とピアノ、楽器を演奏する人、カメラ、ナレーションに分かれて作品を作った。絵本の『てぶくろ』にインスピレーションを受け、作品を作った。

- 1.導入をする人が今から動物になってお話の世界で遊ぶことを子ども達に伝える。そして、子ども達に動物のお面を選んでもらう。選んだ後に座り、物語が始まる。
- 2.画面を切り替え、おじいさんが手袋を落とす。「雪」を歌いながらもう1回画面を切り替え、おじいさんが落とした手袋が大きい手袋に変わる。遊びが終わった後子ども達は座る。



共通の流れとして、動物はその動物に因んだ遊びを子ども達と手袋の中にいる動物として、終わったら手袋の中に入る。

- 3.くいしんぼうねずみが小さくなって歩きながら登場。(左写真)

- 4.「次はどんな動物がくるのかな？」というナレーションの後にカエルになりきりながら、ぴよんぴよんがえる登場。

- 5.ナレーションの後にはやあしうさぎがピアノの音に合わせながら登場。

- 6.ナレーション後に「こぎつね」を歌いながらおしゃれぎつねが登場。みんなで歌う。
- 7.音に合わせてはいいろおおかみが登場。かっこいいポーズを子ども達とする。
- 8.「どんぐり」を歌いながらきばもちいのししが登場。子ども達と身振り手振りしながら歌う。
- 9.「もりのくまさん」を歌いながらのっそりぐまが登場。手袋の中の動物を子ども達と驚かす。その後おしくらまんじゅうを子ども達とする。
- 10.おじいさんの足音が聞こえてきて、見つからないように隠れる。子ども達にも小さくなって隠れるように声を掛ける。その間に大きい手袋を回収。
- 11.おじいさんは手袋を見つけて拾って帰る。
- 12.動物は小さくなっていたから、おじいさんに見つからなかった。
- 13.動物たちが集まり、「見つからなくてよかったね、私たちは新しい家を探しに森に帰るね」と言う。その後、おじいさんが、こいぬ、ナレーション、ピアノの人が集まり子ども達に手を振る。
(執筆者：田中 柚菜)

(2) 子どもたちとの対話について

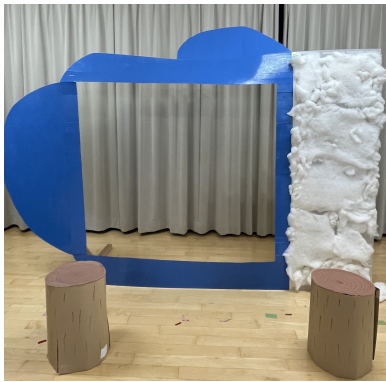
プレ幼教こども劇場では、音響の不具合もあり、子どもの声がちらに届かずに言葉でのやり取りが出来ない場面があった。また、映像越しに見た子どもの姿にもあまり動きがなく十分な対話が出来なかった。プレ幼教こども劇場後の反省では「活動内容が難しい為に動かなかったのではないか」「学生側が楽しそうに演じることで子どもの興味を引き出す」「子どもが遊ぶ前提で声掛けをしない」「笑顔でなりきる」といった意見が出た。プレ幼教こども劇場時の映像を見返すと、子どもは学生側の言葉に耳を傾け、はっきりと気持ちを表していた。しかし、「みんなで〇〇しよう」等と子どもの主体性を遮断する声掛けが多く、改善する必要があった。プレ幼教こども劇場での気づきをもとに、構成を見直し、幼教こども劇場本番では子どもが、学生側の問いかけに興味を示した時に、子どもの言葉に共感したり話題にした。具体的には、「〇〇保育所のお友達。手伝ってくれない?」「一緒に遊ばない?」「〇〇って知ってる?」等と子どもが主体的に遊びに参加でき、対話が広がる声掛けを行った。すると、子どもは「いいよ」というように、自分で決定し遊びへと参加する姿が見られた。また、学生が子どもの言葉に反応した際にはさらに興味を示したり、反応を待つ姿が見られた。対話を通して、応答的に関わることで子どもが、遊びの中での楽しみを見出し、自らの言葉で主体的に遊びに参加することが出来るよう心掛けた。

(執筆者：甲斐田千夏)

『てぶくろ』では、動物同士が手袋に入るために「いれて」「いいよ」というやりとりを軸としてメンバー同士で協力し合って台本を考えた。プレ幼教こども劇場では音響トラブルや自分たちが予想していなかった子ども達の反応で、学生主体でストーリーを進めてしまう場面もあった。後日、反省会を行ない、どのようにすれば、子ども達主体の劇を行うことができるのか意見交換を行い改善していくように心掛けた。練習の中では裏方の学生が子ども役になって実際にコミュニケーションを取りながら練習を行い、様々な対応ができるようにした。本番の幼教こども劇場では、最初の導入部分で手袋の動物たちのお面クイズを行い、子ども達が自然と物語に入り込むことができるように意識した。また、くいしんぼうねずみさんの場面では、子ども達とくいしんぼうねずみさんの会話、ぴよんぴよんがえるさんの場面ではカエルのような体の動きをし、はやあしうさぎさんの場面では音楽に合わせて走ったり止まったりするなど、それぞれの動物のキャラクター、特徴、性格に合わせた遊びをした。

(執筆者:野田栞里)

(3) 表現の工夫



劇で使った道具で物語の名前にもなっている手袋は動物7匹全員が入れる大きめのサイズに作り、手袋の出入りを子どもに伝わるような工夫をした。(左写真)また、手袋の中の様子が分かりやすいように窓枠を切り取り、中の様子がよく見えるようにした。道具はミトン型だったが、おじいさんが落とした手袋は五本指の手袋だった。動物達からしたらとても大きいものだということが伝わるように手袋を落とした後すぐにカメラを切り替え、動物が入る手袋にすり替える演出をした。おじいさんが手袋を取りに帰ってきた際の動物達の逃げて隠れる時に小道具の後ろや、隠れるようなポーズを動物それぞれ違うようにし、隠れるにも色々あることを演出した。

画面登場の際には動物1匹ずつにそれぞれの音を作り、動物達の大きさや動きのスピードを伝えて個性が出るような演出を行った。また、画面だけじゃ伝わらずに子ども達がついていけない部分には随時ナレーションを入れ、場面ごとに声掛けをして子どもと一緒に楽しめるようにした。子どもと一緒に身体を動かして遊ぶ際には手袋の中で遊ぶのは見えづらい為、動物達はその度に手袋の外へ出て元気いっぱい身体を動かし身体が温まるようにし、カメラはアップにして動物の動きが子どもへよく分かるように心掛けた。

(執筆者：黒田美桜)

(4) 音と音楽



音楽は場面の繋ぎ、動物の登場、歌を歌う場面、おしくらまんじゅうをする場面、おじいさんの足音、動物が逃げ回る場面などに使用した。(左写真)最初はピアノのみで音楽をつけることを考えていたが、メンバーと話し合う中で動物たちの楽しい雰囲気子ども達に伝わり音楽を味わうことが出来るように楽器を増やすことになり、ウッドブロック、タンバリン、鈴も

使って演奏をすることになった。また動物の登場する時にはくいしんぼうねずみは高い音で可愛らしい音楽、はいいろおおかみは低い音でどっしりとした音楽というようにそれぞれの動物のキャラクターに合わせて音楽を作り演奏することを意識した。遊びの時には子ども達の動きに合わせて音の速度を変えたり強弱をつけたりして音で子ども達が楽しめるように演奏した。

プレ幼教こども劇場ではピアノの音が音割れしたり音響トラブルが起きて子どもの声が聞こえず、歌を歌う場面でのピアノが弾きにくかった。このことを踏まえて、本番の幼教こども劇場ではピアノのマイクの音量の調節や音の強弱に気を付けたり、子どもの声や表情、動きに合わせて演奏することを大切に取り組んだ。子どもたちが『てぶくろ』の世界の中で、体を動かして遊んだり、歌を歌ったりすることを楽しむことが出来るような音楽を演奏することを心掛けた。

(執筆者：富田結香)

(5) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

2.絵本の世界から遊びへの展開でも記述したが、プレ幼教こども劇場を実践した際、子ども達も学生と一緒に手袋の中に入ったりできるようにと、手袋に見立てた輪っかを用意して子ども達の所に用意しておいたが、子ども達の様子を見てみると、なぜ輪っかに入らなければいけないのか分かっていない子ども達や、棒立ちになっている姿や輪っかの中だけで遊んでいる姿が見られた。子ども達は動物になりきって遊ぶ際に、輪っかの中から出てはいけなと思ってその場で遊んだり、輪っかの外にいる子ども達は、自分の動物ではないので一緒に遊んでいいのか分からず戸惑ってしまっていたのだと思う。子ども達が走ったり、思い切り体を動かし自分の動物以外の時も皆で楽しく遊べるようにと次からは輪っかをなくし、保育室全体で遊べるように考えた。また、動物達のやり取りをする中で「いれて」「いいよ」という場面があるが、子ども達も一緒に遊んで場面に応じて声掛けをし、やり取りを楽しんでいる姿が見られた。この姿を見て子ども達は普段から、日頃友達と遊んだりする中で、「いれて」「いいよ」とやり取りを行っているのだから、子ども達は親しみやすく、楽しむことができているのだろうと感じた。

(執筆：中島さや)

プレ幼教こども劇場では、子ども達がいる場所に輪っかを作り手袋に見立て、「いれて」「いいよ」のやり取りをしてその輪っかに入り、ぎゅうぎゅうになる楽しさを体験してほしいと思っていた。しかし、子ども達の声が聞こえずらく子ども達の「なぜ輪っかに入るのか」という質問に答えることが出来ないまま進めていたため、ただ中に入って遊ぶようになっていたのではないかと感じた。やり取りを行う時は大きな声で言っている姿が見られ、普段の遊びの時から子ども同士でそのやり取りを行っているのではないかと感じた。また、手袋に出てくる動物のお面を被りそれぞれの動物になりきるようにしていたが、選んだ動物が偏っていたりすぐに狭くなったり、遊びをする際に見るだけになっていたりする子どもも見られた。動物が出てきて遊びを行う際に子ども同士でぶつかってしまう場面があったため大きさを変えたり、輪っかから出るように声掛けを行ったりする必要があると感じた。

(執筆：由迫咲希)

(6) 取り組む過程での改善と工夫



取り組むにあたって大きく3つの点について考えた。2.絵本の世界から遊びへの展開でも記述したが、1つ目は、動物のお面を選ぶ前にクイズを行うことにした。どんな動物がいるのかクイズにすることで子ども達がお面に手を伸ばしやすくなるのではないかと考えた。(左写真)2つ目に、当初使用していた手袋に見立てた輪っかを無くして、部屋全体を手袋に見立てることにした。なぜなら輪っかの中で動物になりきって遊んでいた為、子ども同士で身体が当たってしまったり、輪っかの外にいる子どもが遊びに参加出来ない状態だった。そのため学生とコミュニケーションを取りながら遊ぶことに重点を置く事にした。輪っかを使用せず、部屋全体を手袋に見立て身体を動かし遊ぶ事にした。3つ目は、手袋に入る前の「入れて」「いいよ」の言葉のやり取りを物語の中で動物と一緒に言うようにした。その中で子ども達へ問いかけながら一緒に言うことが出来るように活動を考えた。

(執筆：増永千夏)

(7) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

幼教こども劇場当日は子ども達の反応をしっかり見る事ができて、動物と一緒に「入れて」と言っていたり「いいよ」と言ったりする様子が見られた。プレ幼教こども劇場の時と違って子ども達のところに輪っかを使用しなかったことで子ども達も保育室全体を使って遊びを楽しんでいた。遊びの時も学生の真似をしている様子が見られた。おしゃれぎつねときばもちいのししの遊びの時は、学生の真似をして一緒に歌いながら踊っている姿が見られた。はいいろおおかみの時に行う真似っ子遊びでは1回目は物語に出てくる動物の真似をし、2回目は学生と子ども達の勝負を行うようにしていた。しかし、2回目は子ども達は勝負をすることは理解しているようだったが学生と同じポーズをする子どもの姿が多く見られた。2回目を行う前に「違うポーズで勝負する」と言葉掛けを行っていなかったため、1回目では学生の真似をするようにしており、2回目も同じように真似をするのだと感じていたのではないかと思った。また、のっそりぐまのおしくらまんじゅうは子ども達が背中を合わせて1つの円になることが少し難しそうだったが、楽しそうに行う姿が見られた。子ども達は自分がつけているお面と違う動物の時もその動物になりきってお友達と楽しく遊んでいる様子も見られた。子ども達の「入れて」や「いいよ」のやり取りを見て、普段の保育の中で保育士や子ども達同士でやり取りを行っているんだなと感じた。

(執筆：鐘ヶ江 梨奈)

動物が手袋に入りたいけど、入れてと言うのが恥ずかしかったり、なんて言えばいいのか分からず困ったりする場面で、子ども達と一緒に言うて欲しいとお手伝いを頼むと、大きな声と一緒に「入れて」と「いいよ」と声掛けをする様子が見られた。また、一つひとつの動物に遊び等を入れていて、子ども達にも「一緒に遊ばない？」と尋ねると、「いいよ」と大きな声で答えてくれていた。

のっそりぐまの遊びでおしくらまんじゅうをする場面では、後ろ向きで腕を組み輪っかを作った後に飛びながら回る遊びをした。子ども達は保育者の援助をもらいながら後ろ向きで輪っかを作り動物達の掛け声に合わせて楽しそうに遊んでいた。

子ども達は普段から遊びを通して、言葉での伝え合いをしているのだと感じた。

(執筆：戸田有香)



5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【中島 さや】

今回の幼教こども劇場を通じて子ども達への言葉掛けの仕方を学んだ。プレ幼教こども劇場では、子ども達と一緒に遊ぶ際に「一緒に遊ぶから立って」や「すごいね」「かっこいいね」と声掛けをしていたが、それは子ども達にとって強制させるような言い方であったり、子ども達にとってふさわしくない声掛けをしているという事にプレ幼教こども劇場を通して学ぶ事が出来た。グループでどうしたらいいのか話し合いを行いその反省点を踏まえ、幼教こども劇場本番では、子ども達が自分もやってみたいと思えるようにまず学生が楽しんでやるように心がけ、学生主体でするのではなくて、子ども達が主体的に活動できるように行った。また、カメラ越しでのコミュニケーションだったため機械トラブルなどで学生の声が通りにくかったり、子ども達の反応が分かりにくい部分があったりして難しかったが、その経験を通して子ども達に言葉だけの反応求めすぎではなく、ジェスチャーを用いるなどして柔軟に対応する事が大切だということ学ぶことができた。今回学んだ事を実際に保育の現場でも活かしていきたいと思う。

【増永 千夏】

今回の幼教こども劇場を通じて子ども達への言葉掛けの大切さを改めて感じた。準備の過程ではどのような声掛けを行うと子ども達に伝わるのだろうか。また遊ぶ際の子ども達への言葉掛けはどのように伝えと良いのだろうか。学生同士で話し合いながら何度も考えた。遊ぶ際の言葉掛けでは、どのような言葉をかけると沢山身体を動かして楽しめるのか一人一人が考えながら準備をした。実践の際の子ども達の反応はコミュニケーションが多くとることが出来てすごく学びになった。沢山遊んだ事を伝えてくれていたり、物語に出てくる動物の真似っ子をしながら特徴を教えてくれたり沢山の子ども姿があった。その中で沢山の課題を感じた。遊ぶ際には子ども達が十分に身体を使って遊ぶことが出来るように環境を整えることが大切だと思った。身体が当たらないように子ども達へ伝えて遊ぶと怪我をしないで遊べるのではないかと改めて学んだ。また言葉掛けの引き出しをもっと増やすべきだと感じた。同じ様な言葉掛けを繰り返すことがないように、子ども達にしっかり向き合っ声掛けをする大切さを改めて学んだ。

【甲斐田 千夏】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、表現の幅を狭めないことである。準備の段階では、子どもの様子を想定し年齢に応じた遊びを計画していたが、プレ幼教こども劇場で実践すると、上手く対話が出来なかったり子どもと共に遊ぶのではなく学生だけのやり取りで物語が進んでしまう結果となった。そうなった要因として、子どもが遊びに参加する前提で流れを作っていたことや計画通りに進めようとしていたこと、準備物を上手く活用できなかったことがあったと考えた。そこで、1パターンではなく様々な子どもの様子を想定し、子どもが自ら遊びたいと思える活動となるよう内容を練り直した。幼教こども劇場本番では、子どもの興味を引き出せるような言葉掛けや子どもの反応に応じて臨機応変に対応することで、子どもとのやり取りに成功した。また、子どもが自ら遊びに参加する姿も見られ、楽しんでいるように感じた。そこから、様々な子どもの反応を想定し、動物になりきる学生が遊びの幅を広げる声掛けを行うことで、子どもの自由な表現に繋がったのではないかと考える。また、『てぶくろ』を通して、「入れて」「いいよ」というやり取りを大切にしたい。しかし、プレ幼教こども劇場では音響の不具合も重なり、子どもの声が届かない事態に陥ってしまった。そこから、「いいよ」という時には頭上で大きな丸を作って画面越しに見ても伝わるよう改善した。声掛けや動きなど、どのようにしたら伝わりやすいのかを考えることで、子ども主体の活動の重要性に気付くことが出来た。

【戸田 有香】

今回の幼教こども劇場を通して、子ども達への活動の興味の引き出し方や声掛けの大切さを学んだ。子ども達が見ていて退屈さを感じないように子ども達の興味を引くような導入や動物の登場シーンを考えたり、声掛けを考え実践した。プレでは機材問題で子供たちの声が聞こえなかった為、一方的に進めてしまう所もあったが、本番では子ども達の声に丁寧に答えていくように心掛けた。声掛けに関しては、子ども達の返答の内容によって臨機応変しなければなかったが、自分なりに対応出来ていたと思う。また、劇を作り上げていく上で初めは意見のすれ違いがぶつかり合いがあったが、劇の練習を重ねるうちにお互いがお互いの意見を尊重しあえるようになっていった。授業内の練習だけでは足りなかった為、放課後にアイデアの出し合いや練習をしたり、自分達が満足いくまで試行錯誤を繰り返し、達成感を味わうことができたと思う。

今回学んだことを今後保育者になっても活かしていきたい。

【田中 柚菜】

今回の幼教こども劇場を通して、完成させるためにはそれぞれの役割分担が大切だと感じた。役割分担をすることで一人ひとりに責任感が芽生えてくると思った。私は今回カメラと小道具を担当した。カメラでは、カメラの位置や画角、切り替えのタイミングなどを全体のバランスや脚本の内容から考えながら実行した。時には周りから「ここの場面はもっとカメラをズームしてほしい」と教えてもらいながらカメラという役を務めることができた。小道具ではイノシシの杖と切り株を作った。イノシシの杖は実際に竹藪から木を見つけ、それを画用紙で覆った。切り株は段ボールを丸め、木の模様をペンで描いた。どちらもリアルに作る事が出来て良かった。私達のグループは幼教こども劇場本番までに昼休みや放課後を使い、沢山練習を行った。脚本を何度も書き直し、プレ幼教こども劇場の子ども達の反応からもう一度流れを見直し、より良い作品を作り上げられるように工夫した。プレ幼教こども劇場から内容を大幅に変更したが、動物を演じる人たちは臨機応変に対応できていた。みんながそれぞれの役割を担っていたから、大幅な変更もできたのかと思った。幼教こども劇場で学んだ、自分の役割を果たす力を将来に活かしていきたい。

【野田 菜里】

今回の幼教こども劇場を通して、私は、声掛けの大切さを学んだ。また、何度も練習を重ね、みんなで協力して意見を出し合う大変さ、大切さを学んだ。そして、その学びの中で発達段階や年齢、状況に合わせた臨機応変な声掛けをするように意識することで、実際に自分が保育者として現場に出たときに、子ども達にどのように関わるかや、どのように声掛けを行うかなどを学ぶことができた。

また、練習をする中で同じグループのみんなで協力することができたと思う。担当が決まっている中で、幼教こども劇場本番に間に合いそうにないところは協力しあったり、納得できないところは意見を出して改善していくことができた。プレ幼教こども劇場の時には練習の時に想定していなかった子ども達の動きがあったり、機材トラブルで子ども達とコミュニケーションを取ることができず、適切な声掛けができなかったりした。しかし、プレ幼教こども劇場から幼教こども劇場本番までの間に様々なことを想定した上でどのように改善するともっとより良いものができるかを相談して決めることで、練習からプレ幼教こども劇場、幼教こども劇場本番へとさらに良いものにすることができたと思う。この経験を現場で活かして保育を行って行きたいと思った。

【徳田 葵】

今回幼教こども劇場を通して、子ども達の動きやじた遊び方を想像して遊びや導入を考える事の難しさをより感じた。

やはり一番は子ども達が心から楽しめて、「自分もやってみたい」と思える事が大切だと思う。そのためにグループで協力しながらそれぞれの動物の遊びを考えて案を出していたが、あくまで”想像の中での子ども達の反応“であったため、プレ幼教こども劇場を迎えて反省点が多く出た。機械トラブル等もある中で子ども達が楽しめていない事により不安を抱くことになる。しかしそれも子ども達の反応の映像や、先生方のアドバイスを受け取り新しくグループで工夫できる点を試行錯誤しながら考えた。反省点を踏まえ、子ども達の遊びと私達の劇中の動作のメリハリをつけて導入や遊び方、遊びの中に歌を入れたり工夫を加えた練習を幾度も行った。本番では、工夫した導入のお面だったり、保育室全体を使い遊ぶ事にした案がとても良く活きており、カメラ越しでのコミュニケーションや子ども達の笑顔も楽しさも格段に上がったように思う。こうした全体の見通しの予想を踏まえた案や反省点を見つめ、子ども達の発言や行動にしっかりと反応していく大切さも同時に学べた。実際の現場でも活かしていけるように、日々子ども達の様子もしっかり観察していきたい。

【野田 穂乃果】

今回幼教こども劇場で実際に子ども達とのやり取りを通して、その時々に応じた対応や声掛けの難しさを学ぶことが出来た。

プレ幼教こども劇場の時にはロープを手袋に見立てて劇を行ったが子ども達に上手く伝わらず、子ども達はどうしたらいいのか理解出来ていないようだった。子ども達は、私たちの問いかけに反応してくれたりさまざまな反応を見せてくれとても良い学びになった。その様子を見て反省を行い改善した方がいい所をグループの中で話し合い試行錯誤を行った。プレの時には想定していなかった機材トラブルなどがあり対応に困ってしまった。そこで本番に向けてジェスチャーを沢山取り入れるようにし柔軟に対応出来るように改善した。また、どうしたら子ども達が主体的に活動出来るかを考えた。子ども達に楽しそう、やってみたいと思ってもらえる為には、まず自分自身が楽しむ必要があると気づいた。その為笑顔で動きを大きくすることを意識し、声かけに気をつけた。

本番では、子ども達が私たちの動きや言葉を真似して楽しんでくれている様だった。子ども達が遊びに夢中になり声を通らない場面もあったが、声のトーンを変えたり「みんな集まって～」と話を聞きやすい環境をつくるのが大切だと学ぶことが出来た。今後の保育に今回学んだことを活かしていきたいと思う。

【冨田 結香】

幼教こども劇場を通して私が学んだことは子ども主体の保育を行うことの大切さである。『てぶくろ』の台本や遊びについて考える中で学生同士で子どもたちに無理やり参加させる保育になっていないか、子ども達自身が遊びたいと思い実際に遊びを楽しむことが出来る中身になっているか何度も話し合いを重ねた。

しかし、プレ幼教こども劇場では、自分たちが予想していた子ども達の反応と違った時にその場で臨機応変に対応することが出来ず、学生主体で進める場面もあった。その後メンバーで反省会を行う中で改善点を出し合い、プレ幼教こども劇場前より子どもの反応を予想しながら練習を行ったり子ども達が導入の時に「楽しそう」「何が始まるのかな」とわくわくしたり興味を持ったり出来るような流れを作ることを意識した。また幼教こども劇場本番では歌を歌う、ジャンプする、走って止まる、おしくらまんじゅうをするなど様々な遊びをし、子ども達が『てぶくろ』の世界を感じながらそれぞれの動物になりきりながら遊びを楽しむ姿が見られた。

今後の自分の課題は保育を行う中で子ども達への適切な声掛けを行うこと、また子ども達の興味や関心に合わせた保育内容を考え、子ども主体の保育を目指すことだと感じた。今回の幼教こども劇場で学んだ多くのことを活かしていきたいと思う。

【石井 美夢】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びはチームプレイの大切さや子ども達に対する声掛けである。セリフを頭に入れて動きを決めることも大切であるが、背景や道具、このような場合ではどのように支援するかなど様々なシチュエーションを考え練習を部分的に行ったり、話し合いをしたり何度も一通りしたりするなど練習を重ね重ね行う中でよりいっそう、子ども達の動きの対応を予想し取り組んだ。準備過程では大元となる手袋、子ども達用の手袋、装身具、背景で使用する切り株の作成を行った。子ども達の"楽しい"を第一に考え、子ども達が主体的に活動できるように導入や活動、音楽、終わりまですることができ、実際に子ども達の笑顔や反応が見られた。声掛けでは強要や否定などはせず、ありがとうや嬉しいよなどの前向きな声掛けの大切さを身に染みることができた。リハーサルを行ったり、本番を行ったりする中で子ども達の反応はもちろん違いはあり戸惑うことは多々あったが、チームでの協力の元、臨機応変に対応できたように思えた。

【由迫 咲希】

今回の幼教こども劇場を通して、子ども達への声掛けの大切さ、完成させていく中で自分の意見をグループ全員に伝える大切さを学んだ。子ども達への言葉かけについては、プレ幼教こども劇場では遊びの際に子ども達に「かっこいい」や「すごい」などの言葉を使っていたが、ふさわしくない声掛けだと学んだ。また、リモートで行った為プレ幼教こども劇場では子ども達の声あまり聞き取れず上手く言葉で伝えることが出来なかった。そのため、当日は言葉だけでなくジェスチャーを使い子ども達とよりコミュニケーションが取れるように工夫を行った。

自分の意見をグループ全員に伝える大切さについては、どのように物語をすすめていくかなどより良いものにするために、学生同士で子ども達の姿を想像したり発達段階を踏まえて遊びを考えたりし何度も話し合いを行うため、自分の意見を伝えること機会が多く学生全員で作っていくため伝えることがとても大切だと学んだ。

授業の時間だけでなく、全員が揃うことは少なかったが放課後の時間も使い練習を行い当日は、子ども達の姿を見て声掛けを行い子ども達が主体となるように進めることが出来たのではないかと感じた。学んだことを、今後に活かして行きたい。

【黒田 美桜】

今回の幼教こども劇場を通して私は子ども達へのその場に応じた声掛けの大切さを学んだ。劇の練習の際には予測できなかった出来事が本番では度々起こったが、劇を進めることだけでなく子どもの様子にも気を回しながらアドリブを使い臨機応変に物語を進めていかなければならなかった。1回目のプレ幼教こども劇場では自分の役割に集中しすぎて子どもの様子が見えなくなることが多々あったがその時に感じた子どもの様子を思い出しながら本番に向けて子どもの行動を場面ごとに予測して物語を作っていくことを意識した。本番は2回あったが一園ごとにそれぞれの子どもの特色が違い、全く異なる反応になったので劇の進み方も声掛けも変わった。この経験を活かして保育の現場で臨機応変に対応していけたらいいと思う。もう一つはグループで活動する上での話し合いの大切さである。個々で準備を進めていく中で意見が何度もすれ違うことがあったが全員で話し合いをし、意見を擦り合わせていく事でより良い作品を作り上げていくことが出来た。1人では思いつかなかったようなアイデアが13人もいる事により何度も試行錯誤を繰り返し最後には全員が纏って劇を終えることが出来たと思う。

【鐘ヶ江 梨奈】

今回幼教こども劇場を通して、子どもの年齢に合わせた遊びを想像して考える事や子ども達に対するその時に応じた声掛けの難しさを感じた。

学生が楽しむのではなく子ども達を中心に導入や遊びを考えていく事が大切だと思う。そのためにグループで意見を出し合って、プレ幼教こども劇場を迎えた。プレ幼教こども劇場を通して、子どもは輪っかは何に使うのかどうしたらいいのか理解できずに困っていた。また、お面の数と子ども達の人数の事もあって動物が偏ってしまっていた。その様子を見て、グループの中で話し合いをし改善点を出したり、先生方のアドバイスをもらい試行錯誤しながら考えた。反省点を踏まえ、放課後残り何度も練習を重ねていった。幼教こども劇場本番では、お面の数を工夫し導入で今から何の動物が出てくるか分かるようにクイズを行った。カメラ越しでの子ども達の反応がたくさん見られ、子ども達とのやり取りはとても良かったと思う。学生の声が通らない時は、ジェスチャーをつけるなどして工夫することができた。幼教こども劇場を通して、今後の保育に活かしていきたいと思った。